

自由主義の危機 日米同盟を考える

船橋洋一＋G・ジョン・アイケンベリー編著
浅海保著

東洋経済新報社 3000円
作品社 2600円

評・篠田 英朗 (国際政治学者
東京外国語大学教授)

『自由主義の危機——国際秩序と日本』の表紙には、印象的な写真が用いられている。厳しい表情で対峙するアメリカのトランプ大統領とドイツのメルケル首相の間で、腕組みをした日本の安倍首相がじっと話を聞いている。現代世界で日本に期待されている役割を象徴していると考えられ、有名になった写真だ。

自由主義は危機に瀕している。アメリカ力の低下と、欧州諸国との関係悪化により、自由主義陣営の結束が、国際的に揺らいでいる。そのため、東アジアの自由主義陣営の要である日本の価値規範外交への期待が高いのだ。

だが、超大国・中国の躍進を目にして、国力を減退させて自信喪失気味になっている日本の国民は、なかなか客観的に自分の立ち位置を確認できないかもしれない。もしそうなら、日米の12人の研究者が現代国際社会における日本の役割を論じあう『自由主義の危機』は、大いに役に立つ書物だろう。

『日米同盟を考える』は、ジャーナリストとして半世紀にわたって日米両国を観察し続けて

日本に期待される役割



きた著者が、あらためて日米同盟とは何かを問い直す書だ。様々な興味深いエピソードが惜しげもなく披露され、数多くの政治家や言論人の言葉が引用される。その豊饒さは、そのまま60年の歴史を刻む日米同盟の深さの

反映だろう。

だが豊富な経験と深い知識を持つ著者であっても、日米同盟が今後どう発展していくのかについては、断定的な立場をとれない。日米同盟は、それくらいに不思議な要素を持ちながら、ダイナミックに展開している。

一つはつきりしているのは、日米同盟の運命は、自由主義の国際秩序の命運によって、大きく左右されるといふことだ。日本に期待されている役割は何か。二つの書物を通じて、思索は深まる。

◇ふなばし・よいち 元朝日新聞社主筆◇G.J.ohn Ikenberry 米プリンストン大学教授◇あのみ・たもつ 元読売新聞グループ副主筆。